

# 保育における仏教の可能性--子育て支援に必要な仏教の人間観

著者	佐藤 達全
雑誌名	鶴見大学仏教文化研究所紀要
号	14
ページ	119-141
発行年	2009-04
URL	<a href="http://doi.org/10.24791/00000410">http://doi.org/10.24791/00000410</a>



「鶴見大学仏教文化研究所紀要」第14号（平成21年4月）抜刷

## 保育における仏教の可能性

—子育て支援に必要な仏教の人間観—

佐藤達全

## 保育における仏教の可能性

—子育て支援に必要な仏教の人間観—

佐藤 達全

### 一、はじめに

今、子どもに何が起きているのだろうか。文部科学省の「児童生徒の問題行動調査」によると、小学生の暴力行爲が急増しているという。暴力には同級生や教師を殴ったり教室の物を壊したりすることが含まれるが、平成十九年度の件数は小・中・高校をあわせて約五三〇〇〇件（前年度比一八・二パーセント増）で、いずれの学校種も過去最高という。このうち、小学校は約五二〇〇〇件で中・高校に比べると少ないが、前年度比三七パーセント増で、警察に補導されるなどの小学生は八〇パーセントも増えている、いずれも過去最高となっただけでなく、低年齢化も深刻である。<sup>（註）</sup>

しかも、特徴的なことは、昭和五十年代の校内暴力と異なって、ふだんはおとなしそうな子どもが突然に暴力をふ

るうケースが目立つことである。こうした現象に対して文科省は、子どもたちが自分の感情をコントロールできないことや規範意識が低下していることを原因としてあげている。

また、このような暴力行為と結びつけられやすいのが少年犯罪である。今回の発表では、たしかに問題行動を引き起こす児童生徒は増加しているが、少年犯罪そのものは増加しているわけではないので、そのことは切りはなしておく。今回の調査で注目すべきは、へふだんはおとなしそうな子どもが突然に暴力をふるうケースが目立つ<sup>(註2)</sup>という点である。いいかえると、へだれでも暴力行為を引き起こす可能性がある<sup>(註3)</sup>ことである。これは、近年の少年事件を思い起こせばすぐに納得できるであろう。

たとえば、非常に衝撃的な事件として、平成十八年六月に発生した奈良県の高校一年生による自宅放火事件がある。この事件は、両親が医師であり、医学部への合格者が多いことで定評のある中高一貫の進学校（私立）に通っていた長男が引き起こしたものである。その二週間後には、二十四歳の大阪大学四年生が母親を斧で殴って死亡させている。さらに、中学一年生が自宅に放火し、私立高校生が母親に包丁で切りつけて重傷を負わせ、高校一年生の長男が友人にお金を払うと約束して自分の母親の殺害を依頼し、中学二年生の男子が母親の後頭部を金属バットで殴って逃走する等、想像もできないような事件が次々に引き起こされている<sup>(註4)</sup>。

もちろん、このような現象は今に始まったことではない。たとえば、十年前の読売新聞（一九九八年三月二六日付）『論壇98』では、相次いで発生した少年事件を取りあげ、「少年に何が起きているのか」と題して少年たちの心やその背景に迫ろうとしている。

こうした事件がへふつうの子<sup>(註4)</sup>によって次々に引き起こされていることから、当事者にだけ問題があるのではなく、その根底にもっと大きな原因が存在していると考えなくてはならないであろう。言いかえると、単に一家庭の「しつ

け」に責任を負わせて解決できる問題ではないということである。そこで、この小論ではその背景に目を向けながら、対応には仏教の人間観が必要なことを考察してみた。

## 二、乳幼児期にある少年事件の「根」

先に紹介した『論壇<sup>註5</sup>98』で、河上亮<sup>註6</sup>は栃木県黒磯市で中学一年生の男子生徒が女性教師をナイフで刺し殺した事件をとりあげて、「私の学校で明日起こってもおかしくない出来事だと思った」「この十年間で、生徒たちは大きく変わってしまった。他人にどのような影響を及ぼすかを考えて、自分を抑えることが難しくなっている」と述べている。尾木直樹<sup>註6</sup>も、「どの事件の加害者にも共通しているのは、みんなへよい子<sup>註7</sup>だということである」と、同様に受けとめている（『よい子が人を殺す』一三三頁）。

このような見解が出されたのには理由がある。それは、栃木県の事件の前年に、神戸市で日本中を震撼させるような十四歳の少年による小学生連続殺人事件が発生し、その後も同種の事件が後を絶たなかったからである。そして、加害者はいずれも河上や尾木の指摘するような少年だった。

ところで、精神科「小児・思春期」専門外来を担当している原田正文（大阪人間科学大学大学院人間科学研究科教授）は、そうした一連の事件の「根」は乳幼児期にあると言う。原田は「子育ての結果は思春期にあらわれる、というのを強く感じている。乳幼児期から小学校低学年にかけての子育ての結果は、その当時ははっきりとはあらわれない。このことが子育てをむつかしくしている原因のひとつでもある。子育ての結果は、思春期にならなければ、誰の目にもわかる形ではあらわれないのである」と、乳幼児期の関わり方の重要性和難しさを指摘している<sup>註7</sup>。

その上で、原田は大阪府内での大規模な実態調査を踏まえて「子育て現場の状況は、私の想像をはるかに超えて大

大きく変化していた。そして、いっどこで痛ましい子ども虐待が起こっても不思議がないような状態が広がっていることが判明した。この現実を直視し、そこから子育て支援、次世代育成支援、子ども虐待防止などの方策を真剣に考えなければ、日本は今後取り返しのない事態に陥るであろう」と警告を発している。<sup>(註8)</sup>

原田の著書には、「親子関係がうまく形成できず、親に抱かれたことがないために抱くと反つくり返る赤ちゃん、能面のような表情のない赤ちゃん、眉間にシワを寄せた赤ちゃんが加速度的に増えてきた」(『子育ての変貌と次世代育成支援』一五九頁)ことや「ますます増えてくる乳幼児をまったく知らないまま親になる母親たち」(『子育ての変貌と次世代育成支援』一四二頁)の事例が取りあげられている。

そして、子どもとの関わり方に不安を感じたり必要な関わり方ができなかつたりするケースが少なくないという現実を踏まえて、原田は「親のかかわりが子どもの年齢に見合っていない」「その結果、子どもの心の発達のみちすじが歪められたり、停滞したりしているのです」と、日本の子育ての問題点を指摘するのである。<sup>(註9)</sup>

この書は「子育て支援」という視点で述べられているため、幼稚園や保育園での集団保育とは異なっているが、こうした指摘から、現代の乳幼児期の子育て(保育)に必要なことが見えて来るのではないだろうか。それゆえ、原田は「親になるための準備として、体験学習が求められている」と述べて、ハワイのハイスクールで行われている、次のような興味深い体験型の学習を紹介している。

ハワイの高等学校では生徒の妊娠・出産が多いため、保育室を設置していない高等学校には州の補助金が見つからないという。そして、妊娠したカップルは育児教室に通う義務があり、それは高等学校の単位として認められているという。いまだに妊娠をすると、退学になったり、人工中絶したりしている日本とは大きな違いである。

私が感心したのはそれだけではなく、育児教室の内容についてである。妊娠した生徒は、三〜四キログラムの荷

物を一日中抱いていなければならぬという。トイレに行くときも友だちに預けて行かないといけない。育児教室といっても日本のように知識を一方的に教えるのではなく、このような体験型学習だという。赤ちゃんが生まれるとこうなるのだ、ということを実際に体験させているのである。

また、「赤ちゃんはかわいい」という教育ではなく、生まれたての赤ちゃんは羊水で髪が頭にへばりつき、血もついていて、三、四か月の赤ちゃんのように「かわいい」ことはないということを写真やビデオなどで学習するという。このような体験型の学習がなされていれば、イメージと現実の育児とに大きなギャップを感じる数が少なくなるのではないだろうか。今妊娠中の母親に対する教育として求められているのは、知識中心の妊婦教室ではなく、このような体験型の学習である。<sup>(註10)</sup>

### 三、生活体験の不足から生じる問題点

原田の指摘を待つまでもなく、現代の社会はバーチャルリアリティ（仮想現実）コンピュータ技術によって作り出される、現実を模倣した三次元的な環境）と言われるように、生活のあらゆる面で以前よりも実体験が減少している。このことは育児に関して例外ではないため、先に紹介したような母親が多くなり、そうした母親に育てられた子どもが思春期になるころに、種々の問題が表面化してくるのであろう。

子どもの身体や心の本来の姿がわからないために、子どもの身心の発達のみちすじからはずれた子育てをしたり、子育てに大きなストレスを感じたりする場合が少なくないのである。そして、最悪の場合は虐待や育児放棄につながることもさえない。

こうした現状に対し、産経新聞ではさまざまな事例を取りあげて「子ども大変時代」という連載（平成十六年十月

から平成十八年十月）を行って多くの問題点を指摘し、子どもたちに発生しているさまざまな問題を浮き彫りにしている。連載終了後には単行本として出版されたが、<sup>(註1)</sup>そこでは、

肥満や糖尿病などの生活習慣病やアトピー性皮膚炎などのアレルギー疾患が増え、ささいな理由で暴力行為に走る「キレる」子供も目立っています。他人とコミュニケーションをとるのが極めて苦手という子供も以前より多くなっています（『こども大変時代』一頁）。

親の生活ぶりに影響を受けて幼いうちから夜更かしをする幼児が増えています。不規則な睡眠が子供の成長に予想以上に深刻な影響を与えている可能性が、最先端の研究で指摘されています。また、最近の子供たちは軟らかい食べ物を好み、噛む回数が少なくなっていますが、噛むことが脳の活性化や体調などと深いかわりがあることを「咀嚼ロボット」を使った研究などが明らかにしています（『こども大変時代』一二頁）。  
といったことが紹介されている。

また、尾木は、どこにでもいるふつうの子が事件を引き起こす背景として、

本来なら社会の最小構成単位であるはずの家庭は、自分をさらけ出せる一番安心できる居場所のほずである。家庭は言葉など交わさなくても通じ合う、信頼と愛に満ちた空間のほずであった。にもかかわらず、その家族同士の間で、とりわけ少年や少女が、なぜ親を殺さなければならぬのか。あまりにも不幸であり、不条理に思える。残された関係者の苦悩は、深刻であり、想像を絶している（『よい子が人を殺す』一二二頁）。

と、家庭における子どもの「居場所」の問題を指摘し、さらに現在の日本の社会について、

人々の生活は、あらゆる領域において、「勝ち組」と「負け組」に二極化し、格差が固定・拡大した「格差社会」と化しただけではない。「下流層」が急増している。二〇〇六年の総務省調査によれば、年収二〇〇万円以下しか



所得がない人は、一千万人を超えた。総労働人口は、六三八四万人だから、何と六人に一人が、生活保護基準並みか、それ以下の所得しか得ていないことになる。「ワーキング・プア」とか「ネットカフェ難民」という言葉が飛びかうのも当然であろう（『よい子が人を殺す』一五頁）。

バブル崩壊後の日本の進路が明確なビジョンを示せず、自分自身の生き方についても自信が持てず、親が自信喪失状態に陥っているのだ。（中略）結論を急げば、「勝ち組」を目指す能力や経済力、環境に恵まれており、競争に参入する資格も条件も完備しているからこそ、わが子らしさを抑圧し、受験圧力によりアイデンティティーも空洞化させかねないからである。思春期・青年期の精神的自立期に至ると、他者や点数競争に追い立てられて、自己肯定感も弱く、親に対する心からの甘え体験もない子どもたちは、自分が精神的自立を獲得するための呼吸をするためには、まず、このような父親を、そしてその加担者なる家族を抹殺せざるを得ないところまで、精神的に追い詰められているのではないか（『よい子が人を殺す』一一七頁）。

といった問題をとりあげ、こうした状況の中で、日本の青少年に「慢性的な疲れ」や「学習意欲の低下」が多く見られることを指摘している。

疲れる若者たちに「時間に追われて生活している」とする者が三七％と四割近くも占めているからである。しかも、このような「忙しい」人は「つかれやすい」と感じている者が四五％にも達する。全体的に女子の方が体調はよくない。「肩がこる」三二・九％「目がつかれる」三一・五％「おなかの調子が悪くなる」二五・一％と答えている。これでは「ストレスがたまる」者が三六・七％と高いのも納得できる（『よい子が人を殺す』一一八頁）。

「日本の中学生は授業についていけず、学問への情熱も責任感も乏しい」。こんな悲惨な日本の中学生像が、アメリカ・中国・日本の国際比較調査から明らかになった（「中学生の生活意識に関する調査」日本青少年研究所、

二〇〇二年十一月発表)。「自分に満足している」に「よくあてはまる」とした者が、アメリカ五三・五%、中国二四・三%に対して、日本はわずか九・四%。また、「私は、多くの良い性質をもっていると思う」かについては、日本は「よくあてはまる」と「ややあてはまる」を合計しても三四・六%。しかしアメリカは八九・三%、中国は五五・五%である。自己肯定感の面で日本は両国に比べて際たつて低い。このような諸外国との比較からわかるように、現代に生きる日本の子どもたちは、あるがままの自分を受け入れ、自分を愛する「自尊心」(セルフェステイム)がきわめて低いのである(『よい子が人を殺す』二二六頁)。

そして、その背景として次のような日本社会の現状に注目して、多くの少年が悩みを抱えながら悶々としている姿を浮きあがらせている。さらに、学習意欲減退の正体について、

学力低下の一番大きな背景として考えられることは、学習意欲を喚起させるモチベーションの急速な低下の問題がある。換言すれば、勉強する意味や意義、目的がつかめなくなっているからこそ学習意欲がわかないのである。(中略) この最大の原因は、これまでの「手段としての学習」の魅力がうすれた点にある。つまり、かつては成績さえ上げれば、一流大学から大企業に就職でき、「日本型雇用システム」である終身雇用制と年功序列に守られて、一生安心して暮らすことができた。そして、こうした学歴主義的な価値観は、学校のみならず家庭や社会の隅々まで浸透していた。ところが、このような「学歴主義」は一九九一年のバブル崩壊と同時に消滅した(『よい子が人を殺す』二二三頁)。

と、勉強する意味や目的がみつからないことを指摘している。

家庭の在り方は社会の状況に大きく左右されるのであるが、ここではそうした問題にこれ以上立ち入ることは避け、子育てに絞って考えてみよう。尾木は「どこにでもいるふつうの子」が問題を起こす原因として、

そもそも、子どもたちはなぜキレるのだろうか。大人、子どもを問わず暴力行為というものは突然起きる。なぜなら、以前から続いていたストレスや怒りの心情、モヤモヤ感が許容量を超え、ほんのささいな刺激でも、まるで風船に針を刺したかのように爆発するからである。日常的に我慢し過ぎていいるからこそ、一気に爆発するのである（『よい子が人を殺す』一二〇頁）。

と、ストレスを取りあげているし、産経新聞連載の「こども大変時代」でも子どもが慢性的に疲労を感じていると指摘している。同様に「日本の子供はとて疲れてしまっている」と指摘するのは、大阪医科大学の田中英高助教授（小児科学）である。田中は、

かつてスエーデンの研究者とともに、日本とスエーデンの小学四年生から中学三年生までの子供たち（日本側約七百人、スエーデン側約千百人）を対象に心身健康調査を行った。「家や学校でストレスを感じる」「よく死にたいと思う」「カッとしやすい」「わたしの生活はつまらない」これらの項目では、日本の子供たちの「はい」と答えた回答率が、スエーデンの子供たちを大幅に上回った（『こども大変時代』一二二頁）。

と、子どもたちの調査を行った結果を紹介している。このような慢性疲労について、熊本大学の三池輝久教授（小児発達学）は、最近の子供が疲れている共通の原因として、▽夜型生活　▽パソコンやインターネットなどを通じた豊富な情報で頭を使いすぎている　▽周囲に気を使いすぎて、自己抑制しているの三点をあげている（『こども大変時代』一八九頁）。

たしかに、夜更かしが睡眠不足を引き起こし、それが朝寝や朝食の欠食（食欲のなさ）につながることは想像できる。また、少子化と豊かさの中で過保護傾向が強まり、依存症や問題意識の低下や主体的な行動欲求の低下が引き起こされると考えられる。さらに、親が「よかれ」と思ってなんでも先取りする傾向が、子どもの苛立ちや意欲の低下

につながるのではないだろうか。

さらに、バーチャルリアリティー全盛で、人と人とが触れあう体験が不足していることも原因のひとつであろう。また、子どもの心や身体の発達のみちすじがわからないために親は的確なかわり方ができないのである。それを改善するには「中道」の思想が必要になる。いずれにしても、子どもの特性や発達のみちすじを考えると、現在の日本が抱えている問題を解決するためには仏教の人間観に依らなくてはならないであろう。

#### 四、子どもの特性と子育て

それでは、子どもの特性とはどのようなものだろうか。スイスの動物学者ポルトマンは「人間は生理的な早産である」という仮説を立てた。動物の中には、馬や牛のように親の胎内から出るとまもなく歩き始めるものがあるし、サルも生まれてから一週間くらいで親ザルと同じような行動ができるようになる。もしも、ヒトの赤ん坊がサルの赤ん坊と同じような状態で生まれるためには、二十一月も母親の胎内にいなければならないとポルトマンは言う。

また、生命誌研究者の中村桂子（早大教授・東大客員教授・大阪大学連携大学大学院教授等を経てJT生命誌研究館館長）は、

他のほ乳類は、生まれた時に脳がほぼ完成しているのに、人間の脳は誕生後に成長する。この、脳が成長過程にある幼年期は、どこの国でも学校に行かない。それは、この時期には、脳で考え、行動する基本となる感覚を養うため、身体で人間関係を学んだり、生き物の不思議さを感じる体験をすることが大切だとされてきたからです。

（二十一世紀への視座 中村桂子さんと考える」Ⅱ読売新聞 一九九八年五月十六日付）  
と、興味深い見解を示している。

それゆえ、カリフォルニア州で、機能不全な家族の中で育ったアダルト・チルドレンや共依存症・心的外傷（トラウマ）を受けた人びとの治療にあたっている精神療法家の西尾和美は次のように述べているのである。

子どものハートはやわらかで壊れやすい「精神的虐待は、いろいろななかたちをとります。親の態度、言葉、しぐさ、人間関係、コミュニケーションのとり方によって、子どもの安全をおびやかすものから、子どもの人格を踏みにじったり、個性や気質を押しつぶしたりするものまでさまざまです。〈中略〉身体的な暴力はなくても、親の感情の爆発、脅し、罵り、怒鳴りが日常的に飛び交う家では、子どもはいつも萎縮して生活しています。子どものハートはやわらかで、そうした激しい言葉の一つ一つが、容赦なくグサグサと突きささります。それは子どもの精神的な成長をとめてしまうほどのインパクトをもっています（『機能不全家族』三三八頁）。

小学生のころからずっと、「おまえがいい大学に受からなかったら、お母さんは死んでしまうからね」と言われ続けた結果、心理的にかんじがらめになって、学校にも塾にも行けなくなってしまう高校生もいます。親からいつもいや味や皮肉を言われ、罪の意識を植えつけられて育った人は、大人になっても心からその意識が抜けません（『機能不全家族』三九頁）。

「ほんとにだらしがない子ね」「なにをやってもダメな子ね」「だれのお陰で大きくなったと思っているんだ」「あんな子とつきあうんじゃない」 こうした言葉が日常的に子どもに向かって発せられています。その一つひとつがいかにか子どもの心を痛めているかを考えたことがあるでしょうか（『機能不全家族』三九頁）。

ここで問題にしなくてはならないのは、子どもひとりひとりの人格を尊重することであるし、人と人とがどのように触れあうかということである。もちろん、このような問題についてはこれまでもそれぞれの領域で取りあげられているが、それが子育てに十分に定着していないために、さまざまな問題が発生しているのではないだろうか。

## 五、仏教の人間観から得られる保育への提言

残念ながら、現在の日本では、こうした子どもの状況に的確に対応する方法がなかなか見えてこない。そのことが、冒頭に紹介したような子どもの暴力事件をはじめとした種々の問題の背景になっているのではないだろうか。このような現状に対し、仏教の人間観から多くの示唆が得られるように思われる。そこで、ここでは二つの観点から論じてみたい。

### (1) 子ども自身に関する問題に対し

仏教というと一般には保育や子育てとは無縁なものというイメージが強いであろう。しかし、そのような認識は正鵠を射たものではない。仏教は「仏陀の教え」の短縮形であり、仏陀とはインドの言葉であるBUDDHAを中国に仏教が伝来したときに漢字で表現したものである。

それではBUDDHAとは何かというと、「目覚めた人」「人間存在の真理に気づいた人」という意味で、仏教の開祖・釈尊（釈迦牟尼世尊）のことを指している。このことから、仏教は特定のドグマを崇拝する宗教ではなく、釈迦が気づいた人間存在についての真理を学び、それに基づいた生き方を実践しようとする教えであることが納得できるであろう。言いかえると、仏教は「いのちについての教え」「生き方の教え」ということになる。

そこで、釈迦の気づいた真理がどのようなものであるかについて簡単に示しておこう。「生老病死」という人間存在の根本的な問題の解決を目指して出家した釈迦が気づいたのは、「縁起」という原則である。これは、この世に存在するあらゆるものが単独では存在できず互いに関わりあっているということである。自己の存在の基盤が自己にあるのなら何事も自分の思いどおりになるはずであるが、現実はそのようではない。それは存在の原理が「縁起」だからで

あると釈迦は気がついた。

そこから、種々の人間観や世界観が展開する。ここで取りあげておかなければならないことは、「三法印」である。三法印は諸行無常・諸法無我・涅槃寂靜のことである。諸行無常はこの世に存在するものが絶えず変化し続けているということであり、諸法無我はこの世に存在するものが互いに関わりあっているということである。この二つは自分の思いどおりにならない現実世界を直視したものである。

そのことを、釈迦は「苦」と表現している。苦は自分の思いどおりにならない現実を示したものであり、その定型化された世界観は「四苦八苦」と表現されている。四苦八苦とは、生・老・病・死・愛別離苦・怨憎会苦・求不得苦・五蘊盛苦のことで、いずれも自分の意志だけではどうすることもできない現実である。そのため、仏教は悲観的・厭世的な教えと受けとめられやすい。

しかし、忘れてならない重要な点は三番目の涅槃寂靜である。これは穏やかな心で理想の生き方を求めようとする釈迦の目標を示したものである。つまり、仏教は決して悲観的な世界観ではなく、むしろ後戻りできないたつた一度の人生をどのように生きるかを探究するものという点に目を向けなくてはならない。釈迦は、我々の「いのち」には限りがある（諸行無常）からこそ、一日一日を大切に生きるようにと論じている。また、互いに関わりあっている（諸法無我）のだから、相手に対する配慮を忘れてはならないと説いている。

その理想を実現するための具体的な行動規範が「六波羅蜜」や「八正道」として展開されているのである。六波羅蜜とは①布施 ②持戒 ③忍辱 ④精進 ⑤禅定 ⑥智慧のことであり、それぞれの意味は次のとおりである。

- ① 布施は、自分以外のために奉仕する心を持つことである。
- ② 持戒は、約束やきまりを守ることである。

③ 忍辱は、思いどおりにならなくても我慢する心を持つことである。

④ 精進は、自分が果たすべきことと真剣に取り組むことである。

⑤ 禪定は、心を落ち着けて自分や周りをみつめる時を持つことである。

⑥ 智慧は、物事を正しく考える力を身につけることである。

八正道は①正見 ②正思 ③正語 ④正業 ⑤正命 ⑥正精進 ⑦正念 ⑧正定のことであり、それぞれの意味は次のとおりである。

① 正見は、すなおな気持ちで人に接したりものを見たりすること。

② 正思は、自分の都合や独り善がりの考えをなくすようにすること。

③ 正語は、相手の気持ちを考えて話すようにすること。

④ 正業は、自分勝手な行動をしないようにすること。

⑤ 正命は、たった一つしかない命を大切にして生きることにすること。

⑥ 正精進は、なすべきことに全力で取り組むこと。

⑦ 正念は、邪念をなくして正しい生き方を考えること。

⑧ 正定は、心を散漫にしないように心がけること。

また、釈迦の生命観の基本的立場は「誕生傷」として知られる「天上天下、唯我独尊」という言葉によって象徴的に示されている。それは、この世の中に「わたし」という存在はただひとりであり、何ものにも代え難い尊い存在であるという意味である。もちろん、それは「わたし」だけでなく、すべての「生きとし生けるもの」にあてはまることは言うまでもない。



それゆえ、釈迦は「たった一つしかない自分の生命を大事にせよ」と説くと同時に「自分以外のあらゆる生命も自分と同じように大事にせよ」と強調するのである。このように仏教の生命観は、

- ① だれの「いのち」も世界中でたったひとつしかない尊い存在である。
  - ② 「いのち」の尊さは比較して序列がつけられない。
  - ③ すべての「いのち」は有限で、永遠に生きることはできない。
  - ④ それぞれの「いのち」は互いに関わりあい、生かしあっている。
  - ⑤ それぞれの「いのち」が最高に輝くように生きることが究極の目標である。
- ということであるから、決して悲観的・厭世的なものではない。

保育の現場では、こうした目標を達成できるように保育計画を作成し、日々の活動を展開している。たとえば、日本仏教保育協会(注1)では、毎月の保育目標を次のように設定している。

【仏教保育における月ごとの活動のねらい】

	月のねらい	解説
6月	生命尊重 生きものを大切にしよう。	仏法僧の三宝を敬う形が合掌であり、まずは安全・健康な園生活をだれもが送れるように、必要な諸注意を先生などからよく聞いて、自分自身を大切にするとともに、他人を敬い、みんなでその教えを実践しよう。  園生活に慣れてくると、自分を出せるようになると同時に、勝手な行動も見られるようになる。約束やルールを守ることがは社会生活の第一歩であり、そのことで集団で楽しく遊ぶことができる。園生活をより楽しいものにしてよう。  自分の生命の大切さはもとより、あらゆる生き物の生命を大切にすること、さらに生き物以外の物にも生命が宿ることを教えることは、幼児の心の成長の基礎となる。動植物に関心をもつ季節でもあり、探索心を大切にするとともに、生物へのいたわりの心を育てよう。
5月	持戒和合 きまりを守り、集団生活を楽しもう。	
4月	合掌聞法 入園・進級を喜び、園生活に親しもう。	

3月	2月	1月	12月	11月	10月	9月	8月	7月
智慧希望	禅定静寂	和顔愛語	忍辱持久	精進努力	同事協力	報恩感謝	自利利他	布施奉仕
希望を持ち、楽しく暮らそう。	よく考え、落ち着いた暮らしをしよう。	寒さに負けず、仲よく遊ぼう。	教えを知り、みんなで努め励もう。	最期までやりとげよう。	お互いに助け合おう。	社会や自然の恵みに感謝しよう。	できることはすべてしよう。	だれにも親切にしよう。
いつ也希望を胸の中にもち、明るい明日の生活を目ざして、よく学び、よく遊び、よく働き、自分をとりまくすべての人たちとともに、楽しい社会生活を生み出すように努めよう。	三学期の最も安定するこの時期に、静かな時間を持ち、物事に対しじっくりと考えることを心がけ、正しい行動が行えるように地に足のついた生活をしよう。	寒いとき、つらいとき、悲しいときでもくじけず優しい穏やかな笑顔でいるよう努力しよう。そして他人に対して心のこもった優しい言葉かけを忘れずに仲よくしよう。	仏さまの教えを知り、それに少しでも近づくように努力することによって、毎日の生活を充実させることができる。目標は遠くてもじっくり取り組む態度を身につけさせよう。	途中でくじけては、どんなよいことでも実らない。できそうでないことに対しても終わりまでねばり強くやり遂げ、充実感を味わうことを通し、幼児のうちから努力する習慣を身につけさせよう。	一人できないことも二人でならできる。二人できないことでも大勢ならできる。みんな助け合うことによって、思いもかけない大きな仕事ができることに気づかせよう。	自分一人では何もできないことがある。自然の恵みがなかったら、食事を摂ることも、服を着ることも、家の中で暖かく生活することもできない。生かされている自分に気づかせ、慎ましい心で社会や自然に接する心を育てよう。	自分でできることは最後までやり通す辛抱強い心と、他の人が困っているときはその人の気持ちになつて助けてあげる親切な心を持つようにしよう。また、他人から注意や親切な行為を受けたときは素直に感謝するとともに、そのうれしさを友達にもわけてあげよう。	他人に親切にしてもらうと、とてもうれしいものである。この心地よい貴重な体験が少しでも多くなるように知恵を働かせて、みんなどんなときにも隠れた親切をして、社会を明るくすることを知らせよう。

〔日本仏教保育協会編「わかりやすい仏教保育総論」チャイルド本社 二〇〇四年二月十日〕

ここに掲げられた「月のねらい」は、どれも重要な事柄であるが、特に「布施」「持戒」「忍辱」等は、我々が「互いに関わりあつて生きている」ことから、思いやりの心やきまりを守る心や我慢する心をしっかりと育てなければならぬことは当然であろう。ところが、「豊かで平和」な日本では、「子どもにとって大切なこと」を取り違えて甘やかす傾向が強いように思われる。<sup>(註13)</sup>

## (2) 親や保育者自身の問題に対し

そして、もっと重要なことは、親や保育者がどのように子どもと向きあうかである。この問題では、「中道」という思想に注目しなければならない。中道とは偏りのない考えにもとづいて行動することであり、仏教の生活原理として重要な教義のひとつである。この中道は「二拍子のリズム」とも言い換えられよう。

人間の身体は、交感神経と副交感神経が互いに作用しあうことによつて恒常性が保たれている。交感神経は呼吸器や循環器系の活動を促進させ、消化器系の働きを抑制する。これと反対の働きをするのが副交感神経で、このような相反する二つの作用が協調しあつて内臓器官や分泌腺などの機能を自動的に調節している。体温や心臓の鼓動が一定に保たれているのは、その働きによる。

心臓と呼吸を例にあげてみよう。我々が生きている間、心臓は休みなく体の隅々にまで血液を送り出している。心臓は一日に十萬回も拍動しているが、緊張して血液を送り出した次の瞬間には緊張がゆるんで血液は心臓に戻ってくる。呼吸も同様で、緊張して大きく息を吸いこむと、その次には力を抜いて息を吐き出している。どちらの働きも一瞬たりとも休まずに活動し続けているが、我々の体はこのような二つの対照的な活動によつて維持されている。そこで、「いのち」のリズムを二拍子と考えるのである。

二拍子は最も単純なリズムであるが、生命の基本であり、このリズムのバランスが崩れると病気になる。このことは身体だけでなく、心も同様である。つまり、心の緊張とリラクセスのバランスを保つことに重要な意味がある。このような生命のリズムから、親や保育者は子どもの身体と心に過度の緊張状態を引き起こさないように配慮しなくてはならないことがわかるであろう。

ところが、現実にはそのバランスが保たれているとは言い難い。学校から帰っても、緊張から解放されるわけではない。二拍子のリズムが崩れると、心や身体に様々な問題が発生する。現代の子どもは、誰もが日常的に過度の緊張状態に追いつめられストレスにさらされている。それは、まさに「四面楚歌」の状態であり、追いつめられた子どもは「窮鼠猫を噛む」の諺で象徴されるような精神状態と言えよう。そのために、「あの子が」と驚くような少年たちが次々に問題行動に走ってしまうのではないだろうか。(註15)

もうひとつの問題は、「天上天下、唯我独尊」という言葉で示された事柄である。この言葉は、一人一人がかかけえない存在であり、比べて序列をつけることができないことを示したものであるが、日本ではいつの間にか学力試験だけで序列化するようになった。地球上に同じ「ヒト」はいない。それぞれが他に代わってもらえない「かけがえのない(へいのち)」を生きている。それが個性である。教育の目的は、それぞれの個性や特性を尊重し、それを最高に発揮できるように働きかけることでなくてはならない。(註15)

これに関連して『阿弥陀経』という経典の「青色青光、黄色黄光、赤色赤光、白色白光」という教えを紹介しよう。これは、極楽浄土に咲くハスの花は、青いハスの花は青い光を、黄色いハスの花は黄色い光を、赤いハスの花は赤い光を、白いハスの花は白い光を放ちというように、花の色は異なっているが、どの花も最高に美しく咲いているという意味である。青花がその美しさを最高に発揮できるように育てることが本来の教育であることを『阿弥陀

経』は示しているのである。

日本語の「教育」という言葉からは「教える」「知識を注入する」という意味合いが強く感じられるが、英語の EDUCATION（教育）からは、その本来の意味が伝わってくる。EDUCATIONの語源はラテン語の EDUCATIOであるが、その意味は「引き出す」「導きだす」である。「阿弥陀経」に示されるように、一人一人の特性を見きわめて、その特性が伸びるように働きかけることこそ、まさに本来の「教育」の姿ではないだろうか。

最後に挙げておかなくてはならない点は、「いのち」とふれあう体験が不足していることである。都市化によって作物や家畜とふれあう機会が減少した。それだけでなく、地域社会において異年齢の子どもが群れて遊ぶことがなくなった。「ダイヤはダイヤで磨く」という言葉がある。地球上で最も硬い鉱物であるダイヤはダイヤの粉でなければ磨けないことを示したものである。それと同様に「いのち」は「いのち」とふれあうことによってしか本来の輝きを放つことができないであろう。

ところが、都市化によって動物や植物が身近な存在ではなくなってしまうた。そのため、「いのちを大切にしよう」と言われても、子どもたちには実感が伴わないのではないだろうか。食卓に並べられた食べ物、自分と同じように「いのち」をもってこの世に生きていたなどと考える子どもは少ないであろう。「論より証拠」の言葉どおり、百万言を費やすよりも畑やプランターで野菜を育てることで、「いのち」と向きあう貴重な体験をすることができる。ウサギや鶏などの小動物を飼うことによって、「生きている」ことを実感することもできる。心臓の鼓動や動物の体温が、子どもたちの心に大切なことを伝えてくれるのである。<sup>註16</sup>

また、家庭におけるお手伝いも大切なことである。年齢によってできることも限られるが、幼児にできることもたくさんある。手伝いをしてほめることである。そうすることで、子どもなりに「自分が認められた」と感じ、自

己肯定感の形成にもつながるのではないだろうか。<sup>(註17)</sup> 仏教では作務と称する労働を重視している。これは、心身一如・行学一如とも言われるが、我々の身体と心が密接に作用しあっていることに基づいた修行の形である。

## 六、おわりに

このように見てくると、現代の子育てに仏教の人間観が重要な役割を果たすことがわかるであろう。それは、特に次の二つの視点においてである。

① 体を動かすことを基本にすること。多くの人がとかく早期教育に走りがちであるが、乳幼児期はその発達のみならず、知識を詰めこむことよりも感性を養うことを重視すべき時であることが指摘されている。<sup>(註18)</sup> それゆえ、知識を詰めこむことよりも、体を使って人や自然（動物や植物）との触れあいを多くする。友だちとの遊び・動物飼育・花や野菜の栽培を通し、身体で生きていることを体験する。こうしたことによって、子どもは自然に「いのち」の姿に感動したり大切なことに気づいたりすることができるであろう。

② 子どもの心が本当に安心できるようにする。子どもの行動を指示するのではなく、やりたいようにするのを見守る。たとえ失敗してもしからぬ。子どもをそのままのみとめる（否定的な言葉を極力避けて、「それでいいんだよ」「よくやったね」「ありがとう」等の肯定的・受容的な言葉を多く用いる）ことである。これは子どもの「居場所」を作ることであり、自分の「いのち」の尊さに気づくことにもつながる。自分の居場所があると子どもの心は落ちつくものである。子ども時代に本当に心がゆったりする体験を重ねることにより、子どもの心が生き生きと活動し始めるだけでなく、相手を思いやる「ゆとり」も生まれて来るのではないだろうか。<sup>(註19)</sup>

【参考文献】

- 原田正文『子育ての変貌と次世代育成支援』（名古屋大学出版会 二〇〇六年七月二五日）  
尾木直樹『よい子が人を殺す』（青灯社 二〇〇八年八月三十日）  
産経新聞「生命」取材班『子ども大変時代』（産経新聞出版 二〇〇七年六月十日）  
西尾和美『機能不全家族』（講談社 一九九九年十月二十日）

註

- （註1）調査項目は次のとおりである。①暴力行為（国公立・小中高特別支援学校）③出席停止（公立・小中学校）④高等学校の不登校（国公立・高等学校）⑤中途退学等（国公立・高等学校）⑥自殺（国公立・小中高学校）⑦教育相談（都道府県、政令指定都市、市町村・教育委員会）調査結果の主な特徴 ①暴力行為の発生件数は約五万三千件と、小・中・高等学校のすべての学校種で過去最高の件数に上ること。②いじめの認知件数は約十万一千件と、前年度（約十二万五千件）より約二万四千件減少しているが、依然として相当数に上ること。③高等学校における、不登校者数は約五万三千人（前年度約五万八千人）、中途退学者数は約七万七千人（前年度約七万七千人）と、近年、減少傾向にあるが、なお相当数に上ること。④自殺した児童生徒が置かれていた状況として、「いじめの問題」があつたケースが五人（前年度六人）計上されていること。調査結果の要旨等の詳細については文部科学省初等中等教育局児童生徒課、平成十九年度「児童生徒の問題行動等生と指導上の諸問題に関する調査について」を参照。
- （註2）このことは、少年刑法犯検挙率人員・人口比の推移から明らかである。
- （註3）このことについては拙稿「子育て（家庭教育）の根本問題と仏教の人間観……いの中のリズムは二拍子ということについて……」（『教化研修』第五十一号 曹洞宗総合研究センター 二〇〇七年四月一日 参照）
- （註4）こうしたことについては多くの識者かが指摘している。たとえば田中孝彦は「日本の子どもの世界の十年」と題して一九九〇年代初頭からの子どもの問題を要約している（『生き方を問う子どもたち』一頁 岩波書店 二〇〇三年五月二九日）。
- （註5）中学校教諭・著書に「プロ教師の仕事術」（洋泉社）等。

(註6) 教育評論家・法政大学教授。著書に子どもの危機をどう見るか「思春期の危機をどう見るか」(いずれも岩波新書)等。

(註7) 原田正文『子育ての変貌と次世代育成支援 ……兵庫レポートにみる子育て現場と子ども虐待予防……』(はじめに)(名古屋大学

出版会 二〇〇六年七月二五日)

(註8) 原田『子育ての変貌と次世代育成支援』(はじめに)

(註9) 原田『育児不安を超えて』二二頁(朱鷺書房)一九九三年二月二十日)

(註10) 原田『子育ての変貌と次世代育成支援』一五八頁

(註11) 『子ども大変時代』産経新聞出版 二〇〇七年六月十日

(註12) 社団法人日本仏教保育協会は、仏教の教えに基づいた保育活動を充実させ、仏教保育を推進するために全国の仏教系の幼稚園・保育園・保育者養成機関が昭和四年に宗派を超えて組織したものである。

(註13) ルソーはその著『エミール』のなかで、「子どもを確実に不幸にする育て方」という逆説的な表現で甘やかすことに対する注意を喚起している。

(註14) このことに関しては、拙稿「子育て(家庭教育)の根本問題と仏教の人生観」(前掲)ならびに「仏教保育に期待されること……」  
「いのち」のリズムと行字一如の視点から……」(日本仏教教育学研究)第十六号 平成二十年三月)参照。

(註15) 子どもを序列化しないことは、子どもの居場所を作ることでもある。このことに関して、西尾は次のように述べている。

抱きしめる、撫でる、やさしい言葉をかける、愛情にあふれた表情……こうしたことは、子どもの健全な発達には欠かすことができない要素です。子どものころから親にそうした愛情表現を受けられなかった人は、大人になっても感情の表現がうまくできないことが多いようです。(機能不全家族)四十頁

「おまえなんか生まなければよかった」「お前なんかうちの子じゃない」「男の子だったらよかったのに」「あんたさえいなければ」など、子どもの存在を根本から否定するような言葉や態度も同様です。(機能不全家族)四二頁)

こういう言動を長期にわたって受けていると、子どもはしだいに、「自分はこの世に存在してはいけないんだ」という気になつてしまいます。すると、自己を肯定することができず、そこで精神的成長がとまってしまうことがあります。(機能不全家族)四二頁)

いつも他人やほかの兄弟姉妹と比較される、親の期待が大きすぎるあまり、なにをやっても親から満足してもらえない、プライベートな日記や手紙を読まれるなどといったことも、子どもを傷つける要因になります。(機能不全家族)四二頁)

逆に、子どもをベツトかなにかのようにあつかったり、子どもに媚びて、なんでも言うなりにするのも、別の意味で、子ども



の人格を無視した態度といえます。(『機能不全家族』四一頁)

「ありがとう」という感謝の言葉は、何度言っても言いすぎるといふことはありません。人間関係を円滑にし、肯定的な方向に導いてくれます。とくに子どもに対しては、なるべくたくさん言うようにしてほしいものです。(『機能不全家族』一七四頁)

親の否定的な言葉は子どもをとても傷つける。(『機能不全家族』一三八頁)

(註16) このことに関しては拙稿「生かせ生命」の保育(『日本仏教保育協会編「わかりやすい仏教保育総論」チャイルド本社 二〇〇四年二月)参照。

(註17) このことに関連して、尾木が次のように指摘している点は興味深い。

幼児に見られるここ数年の変化として特に気になる点は、「親の前ではよい子に変身する」子が急増している点である。いちばん安らげるはずのわが家において、あるがままの姿をさらけ出せていないのである。「お母さんの前ではよい子でいなければ」と、必死で「よい子」を演じ続けているのだ。「あるがまま」では母親に受けいれてもらえないことが体験的にわかっているからである。それは幼児に限ったことではないように思われる。(『よい子が人を殺す』二二七頁)

(註18) すでに紹介した生命誌研究者の中村桂子の指摘参照。これに関連して脳研究の第一人者である養老孟司は「子どもの感覚がおかしくなってきたのは、子どもを子どもらしくではなく、早く大人にしてしまおうとするから」と指摘して、「子どもには体を使って働かせなければならぬ」と主張している。(『週刊朝日』二〇〇六年八月四日号)「子どもには体を使って働かせなさい」朝日新聞社)さらに、元国立教育研究所長の富岡賢治(群馬県立女子大学長)は「農業に触れ、親しみ、額に汗して手伝いする経験は、子どもの心の成長に計り知れない効果がある」「ホンモノに触れることは計り知れない効果が生まれる」として「子どもにも農業体験を」と呼びかけている。(『読売新聞』二〇〇九年一月十八日付)

(註19) このことに関して尾木は「暴力をくり返す子どもに対しては、心にゆとり空間を作ってやることである。我慢の許容量以上に大人の側が子どもをしっかり受けとめてやることではないだろうか」と述べている。(『よい子が人を殺す』二二三頁)